

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

● 100万人参観者運動を

84年9月来館者数	5,170名
通算1カ月平均来館者数	4,948名
当月1日平均来館者数	199名
通算来館者数	494,823名

NHK特集

「核戦争後の地球」を制作して

玉造仁一

この原稿のお話があった夢の島にある第五福竜丸を訪れ、船に再会したのは十六年ぶりであった。熊野灘の海底に消えていった福竜丸の心臓とも言えるべきエンジンを取材して歩いた日々。九州、大阪など全国に住んでおられた乗組員の方々を訪ね、お話を伺った日々が、あつたの風景が一変していったのは大変驚かされた。

二年前、わたしたちが核シナリオプロジェクトのチームをつくり、核シエルトのような部屋でシナリオの検討を始めたとき、世界は大変な緊張感に覆われていた。そのような時期、アメリカのABC放送はザ・ディ・アフターを、イギリスのBBC放送はスレッズの制作を始めていた。いずれも今世紀最大のテーマと言わなければならない。

(もし一メガトンの核爆弾が東京上空で爆発したならば……)、そのとき、地上やビルの中の人々は、

車や鉄道は、東京湾では、どのような姿になり、どんな運命に見舞われるのだろうか。核爆発の恐ろしさを科学的にアプローチし核のもつエネルギーの強大さとは何か、その後降り続く死の灰とは何か、核シエルトは人々の命を守るのだろうか。疑問や謎が完全に解けぬまま取材に走り回り始めた。

東西関係が厳しく対峙している西ドイツでは、連邦防災学校がある。ほとんど毎週、核戦争を想定した救助の実地訓練がおこなわれていた。ボランティアで参加する市民が負傷者の役割を演じ、市町村当局の現場担当者が、どう対処すれば良いか、実物の放射性物質を使って行っている。核及び生物、化学汚染についての専門的知識を持って、負傷者の救助、緊急通信、消火などに当る、模擬訓練とはいえ、その危機的状況は本物に近いものであった。

わたしたちの取材が進み、編集に入る頃戦争は現実になり起る状況

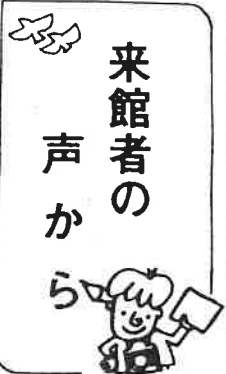
況と思えて来るのだった。八月五日、六日の放送を見た多くの小、中学生、高校生からの電話は、もう生きる気力が無くなってしまった。馬鹿馬鹿しくて勉強する気がしなくなった。クラブ活動など無駄に思えてきた。一生懸命貯金しても駄目だと思えてきた。これから一生懸命勉強し世界の政治を変えなければならぬと思った。

などその数、千件をこえた。両日にNHKへの電話はコール数で七万件、通話数で三万件にも達した。手紙やハガキ合せて四百通、その中にはアメリカのレーガン大統領、ソ連のチェルノゴ書記長宛のものも数通あり、翻訳して郵送を依頼して来たものもあった。NHK始って以来の出来事であった。

この夏は、第五福竜丸見学者は五千人を超え、これまでの八月の最高を記録したと聞いた。今世紀最大の悪魔である核兵器が地球上から消えるまで、何時までも、核に対して強い関心を持ち続け、来るべき二十一世紀は核兵器の無い世界にしたいものである。

(NHK制作技術局・カメラマン)

来館者の声から



はじめてきました。きいてはいたけど写真を見て、びっくりしました。第五福竜丸も死の灰を浴びてたいへんだらうと思いません。まだ私たちにはよくわかりませんが、写真を見ておどろきました。

こんどゆっくり、きたいと思えます(大田区立新宿小学校、四年二組、一〇才)。

おそろしくて、とても凝視できませんでした。一人で来たことを



山形県米沢市立第一中学校
2年生 (84.9.6)

私たちは文化祭で「第五福竜丸」をつくってみました。設計図もなく、適当に作ったのだが、今こ

放射線被害のおそろしさを実感して

第五福竜丸見学の際には、ありがとうございました。広島・長崎にと、原爆を投下されたことはマスコミを通してよく知ることができましたが、実際全身にまで及ぶ放射線障害は見たこともなく、実感としてとらえられないものがありました。けれど、貴館の見学で説明をうかがい、原爆よりもっとおそろしい威力をもつ水爆をやまったら使い方をしたときの被害の大きさを知ることができました。

原爆、水爆とは少し異なりますが、放射線の利用法としての放射

後悔しています。見つめなくてはいいけないと思いつつ、船に背をむけ資料を見るのが精一杯でした(青

短二年、十九才)。

アメリカが「戦争をなくすために核実験をやる」なんて言っていたと書いてあったけど、そんなのうそだと思った。核実験をやれば被害者もでてくるし、そうでなかったとしてもあのきのこ雲をみるのはあまり気持ちのいいものではないと思う。核実験をやるお金があるなら、世界の難民を助けてもらいたいものだ(埼玉県上尾市立葺中、三年二組)。

編集後記

▼NHKの玉造仁一さんのお父さんは広島に原爆が投下された時、軍務で救助のため爆心地に入った。戦争が終わる家にもどったが、広島のこと何もうらなかつた。だが、夜うなされるようになった。玉造さん、小学一年生の時だった。「あの日を境に、父の寝顔のイメージが違ってしまった」。番組の影響には「原爆の威力のみに視線が集中し、それだけで原爆を知ったと思われたら悲しい」と。

▼神奈川県相模台高校の「原爆を語る会」が、8ミリ「記憶—第五福竜丸の訴え」を完成させた。同会はこれまで原爆をテーマに三本のスライドを制作し、毎年文化祭で発表してきた。「来年も再び第五福竜丸をテーマにもっとよい作品を作りたい」と顧問の橋先生。文化祭終了後は平和教材として、他校にも利用されているという。

▼七月三十日に開かれた「科学者フォーラム」の内容を知りたいとの声が寄せられている。次号で、

い。

秋晴れの第五福竜丸展示館でつどい

九月二十三日、久保山忌三〇周年

「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」——久保山愛吉氏がなくなつて三十周年の九月二十三日、焼津で東京で、遺言を守りぬく誓いのつどいがおこなわれた。焼津では三・一ビキニデー静岡県実行委員会の主催による墓参行進と墓前のつどい。弘徳院の墓前に境内あふれるほどの多数の人々が参列し決意を新たにされた。



焼津・久保山さんの墓前に献花

に、病床の久保山さん、葬儀の写真、絶筆、激励の手紙などに見入り、秋晴れの展示館前広場では一日中いくつものつどいもあつた。午前中、東京原水協がよびかけた見学会と交流会。二十名近い参加者は見学会のあと記念碑前に車座になつてこんだん。江戸川の被爆者の高木さん、事件当時杉並区で署名運動に走りまわつた魚屋さんの菅原さん、保存運動にとりくんだ三井さん、山崎さんなどがそれぞれ報告、原水爆禁止世界大会の決議実践などが話し合われた。午後、平和と軍縮をめざす全国連絡会がよびかけた九・二三平和

のつどい。約二百名の青年が色とりどりの旗、風船、プラカードを持って参加。東友会・第五福竜丸平和協会などの代表のあいさつのほか参加者から決意表明がおこなわれ、隅田川の永代橋まで平和行進。第五福竜丸の保存を！資料室の建設を！の横断幕もあり、都民に核戦争許すまじを訴えた。終日、久保山忌句会。四回目とあつて毎年一度福竜丸に会うのがうれしいという俳句人も増えた。早くから館内外で名句への題材をさがつた三十名近い俳句人は、午前十一時、記念碑前で誓いのつどいを開催。りんどう、けいとう、小菊など持ちよつた草花を碑文の前に献花、参加者の思いは焼津にまた遠くビキニの海につながつていた。

日本平和教育研究協議会シンポの見学会も

九月二十三、二十四日の両日、東京でひらかれた第12回全国平和教育シンポジウム東京大会に参加した代表による「第五福竜丸見学会」が前日の二十二日夕方おこなわれ、約五十人の人々が船を見つめ、東京の平和教育の原点を話し合つた。広島をはなれはじめて東京でひらかれる同シンポの関連

大田区の生協から募金二〇万円

九月二十九日、大田区あけぼの生活協同組合のお母さん二人が展示館を訪問。第五福竜丸保存に役立てて下さいと二〇万九千七百一円の募金を寄せられた。七月にみんなで展示館を訪ねた際、泣いているような、傷み激しい船体を見、館内で修理のための募金がすすめられているのを知つて、組合員で作っている反核平和実行委員会が中心になつて募金をよびかけたとか。一日も早く船を直してと訴えられた。

元第五福竜丸乗組員—増田三次郎さんの死

やす子夫人(看護婦)に聞く

「川島正義さん(当時四〇)、昭和五十年四月肝硬変で死亡、増田三次郎さん(同五二)、五十四年十二月肝臓がんで死亡」——久保山愛吉さんの死は知られても、その後亡くなった元第五福竜丸乗組員の川島さんと増田さんの死についてはあまり知られていない。特に、増田さんは生存中、福竜丸のことについていささか語らうとしなかつた。九月二十四日、焼津市石津に住む夫人の増田やす子さんをたずねた。

「昨日、久保山やす子さんと乗組員の人がお墓参りに来てくれました。お父さんもきつと喜んでいてと思います。でも正直いって、まだ他の乗組員の人たちの姿を見るのはつらいんです」。

ただひとり傷あとを残して無帽のまま甲板で作業中灰を浴びた増田さんは外傷を深く受け、二十三人の乗組員の中でもっとも重症といわれた。後頭部の一部は火傷のあとのようになつた。他の乗組員がその後外傷が消えた中でただひとり傷あとを残した増田さんはそのことを気にし、マスキの取材を拒み、やす子さんにも勤め先を知らせないほどだった。



放射能被害の最も重かった増田三次郎さん

増田さんは知り合いの人に頼まれ、福竜丸に初めて乗船し、事件に遭遇した。「福竜丸に乗らなければ」という思いが増田さんにつきまとつた。元乗組員でつくる「福竜丸」に顔を出すこともほとんどなかった。船が好きで、退院後も

●増田三次郎さんの手記
急にKが「毛がぬけないかね」とたずねた。私は手を頭にやっ毛をひっぱってみると、なんの苦痛もなく一束の毛髪があつたりとぬけてしまった。これにはすっかりびっくりして、もう二度と髪に

手をやる気などしなくなった。私は乗組員のなかでも最もひどく顔色が変わつてしまった。自分の顔色があつたりとぬけてしまつた。何度か顔を洗つてみたが、なんの効果もなかった。「現代人は狂っている」より

船舶機械の整備などの仕事をしたが、生計を支えてきたのはやす子さんだった。東大病院入院中静脈瘤のできた左足は細くなり、ひきずるように歩いた。始終、風邪をひき、だるさを訴えた。川島さんと同じように五十年、やす子さんの勤める病院で、川島さんが血を吐いて亡くなつた。増田さんが倒れたのは、それから四年後の十一月。一粒種の娘さんのために、家を新築したばかりだった。下痢をくり返し、意識不明となる。その後意識はもどつたが、腹水がたまり苦しみ続けた。やす子さんは担当の医師から、がんであることを告げられる。「お父さん、何かいいたいことないか」とやす子さんは何気なく聞いた。「何もいうことないな。兵隊にとられ、弾をくぐつてやっと生き抜いたのに、こんな病気になる

「死ねるか」と増田さんは答えてた。ある日、やす子さんが病室に入ると、増田さんは黙つてごみ箱を指さした。見ると血だった。「ああ、俺も川島と同じように血を吐いた。ちくしょう」——増田さんが亡くなったのは、それから二日後だった。増田さんの遺体は解剖され、被ばくによる影響を調べるため臓器の系統的な組織検査が行なわれた。だが、その結果は今もやす子さんに知らされていない。福竜丸を見た
「別の病気ならしかたがないが、今度、川島さんやお父さんと同じ病気で死ぬ人があつたらたらまらない」とやす子さん。
最後に展示館のことを話すと、「お父さんの乗つていた船なら、一度娘と見にいきたい」と語られた。

